

「書く」ことは「変わる」こと

——障害児学校における作文指導——

浜 本 宏 子

作文指導をしていくとき常に考えていたのは、書くことよって子どもが変わるような指導をしたいということであった。立派な作文が書けても、それが「書く前に思っていたことがその通りに書けた」ものであるならば、書いたことの意味は少ないのではないだろうか。中学生の段階では、書くという行動を通して自己を見つめることにより、漠然としていた考えがはっきりとしてきたり、認識が深まったり、変化したりしていくはずだと思ふからである。作文を書いたあとに自分に生じた変化（成長）に気づくことが、書くことの喜びに直結しているとも言えるだろう。

一、いろいろありがとう

——ことばで認識する——

一九七三年九月、工場見学のとと礼状を書くことになった。ところが、「いろいろありがとうございました」、「とても勉強になりました」という調子のものが多い。この礼状を読んで、私はふと思ひ出すことがあった。

新光園分校に転動してきた当初、子どもたちの表情にとても気になるころがあった。意外と明るく素直な子どもたちの中に、ふつと感じられる空白の瞬間とも言うべきもの。それがどこから生じる

のか、やがて分かった。上下肢や言語に障害をもっているこの子どもたちは、何かをしたいと思うとき人の手を借りねばならない。「よし、てちようだい」と言っても、誰かが手をさしのべてくれるまで待っていないければならない。「待つ」ことがあまりにも多くなると、次第に積極的な心の動きを示さなくなっていく。自分の心をゆさぶる出来事にも無関心になっていく。私が空白の瞬間と感じたものは、子どもたちが心の動きを止めたその状態なのだ。それは、生きていくための自己防衛本能なのかもしれない。しかし、本當に生きていくためには、心は、ゆさぶられなければならない。

子どもたちは、通り一遍の礼状で工場見学という一つの出来事の前を通り過ぎようとしている。いま、ここでゆさぶられなければならない。私は、ことばによる再体験を試みた。子どもたちは立ち止まり、自分は何を見、何を感じたのかとふり返ることを始めた。

一〇月は西鉄電車で貝塚公園へ、翌年二月にはデパート「アピロス」へ出かけた。

木嶋誠二（一九才）

・ にしてつのみなさん ありがとう（一〇月）

・ あびるすみなさん べとははめていきました びっくりしま

した お世話になりました たくばくおかいました (二月)

田処智祥 (一九才)

・ にしてつのみなさんありがとうございます (一〇月)

・ ありがとうございます ありがとうございます とてもたのしかったです かいものをしたのわ はじめてであがりました とてもべんきょうになりました (二月)

一〇月の手紙に比べると、二月の手紙では具体的な内容を思い浮かべながら、楽しかったことをはっきりと書いている。九月の工場見学の際、「とても勉強になりました」と書いた森さんは、二月にはつぎのような礼状を書くことができた。

アピロスの皆様お元気ですか。私は元気です。

二月二十六日は お世話になりました。自分でお金を出して買物ができたとがとてもうれしかったです。

中一では本を自分で選んで買うということを前から考えていました。それがアピロスで実現したので。私はよかったな一と思えます。品物をいろいろと見ていたら、どれにしようかまよったりしたけど楽しかったです。

お花やお人形やよぶ茶などありがとうございます。お花は小学部6コと中学部でいかれ(なかつ)た人にあげました。本当にありがとうございます。

私は星の王子さまの本を買いました。今読でいます。とても良い本です。

また行こうと思ってます。そのときはよろしくお願いします。

さようなら

人の手を借りずに自由に店内を見てまわり、好きなものを選んで買うことができた喜びが、素直にあふれている。

書くことの楽しさを知ってきた彼らは、「学級だより」(二月二回)しか面会できない親に学校生活を伝えるために発行していた)、原稿を持ってくるようになった。そして、最終号は中一全員による企画・投稿・編集・印刷ででき上がった。その中に「中一の思い出」と題した文章がある。

田処智祥

とても中一になたことおうれしなふあんきもちでした。一がきまではくごがきらいでしたが、二学きにてがみを、かいてかすきになりました。

あびろすにいて、じふんで、かいものおしたことがうれしかた。

木嶋誠二

みなさん、ことばを、いわせて、もらって、ありがとうございます。ございました。がっきゅうかいで、せんせい、から、ことばを、い、なさいとい、ってもらいました。うれしかた。

清水美紀

一年間、私はいろんな事を教えられそして、いろんな行動をしてきました。

その中で一番自分のためになったと思うのが社会見学でした。

一学期は、人丸神社（略）、三学期はアピロスに行きました。

一学期、私は自分の障害の事なんか言わないほうがいいし、勉強だけすれば（略）いいんだと思っていました。

人丸神社の時はよその人がいなかった（か）らヒソヒソうわさされなくてよかった。（略）

ちょっと変な言いかたですが、私は、たしかに、見学するのは楽しいのです。でも私は生まれた時から下半身マヒで、トイレもわからないという、一つの悩みがあるのでそれを思うと悲しくなります。

工場見学すると、どちらの工場も同じように工場のかた達は機械について他の工場などについて、やさしく教えていただきました。

それなのに、私達はお礼を言わずに帰ってきたのです。それを先生から言われて気がつくなんて、中学生として恥しい事をしたと思いました。

「みんなでお礼状を書こう」ということに決定しみんな書きました。

もちろん私も書いたのですが、先生に見ていただくというのがあるがとうございます」ってどういう意味といわれたので、その事を書いた方が良いといわれて、ハッと気がつきました。手紙を今度は自分の障害についてくわしく書きました。

それから私は障害者だからってなにもしないじゃいけないんだもっとふつうの人と同じ様に行動したらいいんだと感じるようになりました。（略）

さまざまな体験（感情）を、ことばで自分の中にはっきりと認識することが不十分であるために、自分だけの細やかな感情の動きをとらえることがむずかしかったが、やがて、自分の心の動きを「ことば」化し、見つめ始めた。礼状を書くことを通して自己を見つめるといふ経験（自分自身に対して第三者となる意識）は、子どもたちの視野を広げ、確かな認識と豊かな感情を培っていったようである。

二、幼稚な運動会

——書くことによる認識の変化と深化——

足に装具をつけて歩行訓練をするために入園した宗さんは、それまで地元の小学校に通っていた。分校では最も軽い障害をもつ男子であった。

彼が中学部に進学した一九七五年、分校では数年間跡絶えていた運動会を実施した。運動会の目的・準備・係・競技種目などについて、各クラスや児童生徒会では話し合いを重ねていった。彼のクラスでは、「中二、中三が名案を出してくるだろう」という安心感があるせいか、どうもいい種目を思いつかないようだ」と担任が嘆いていた。話し合い・係活動・競技の練習と、運動会一色の日が続き、やがて運動会は終わった。

感想文は全員が提出した。多くの子が、競技や係活動の楽しかったことを書いている中で、宗さんは「今年の運動会は、僕はあまりおもしろくなかった」と書いていた。綱引きなどの運動会らしい競

技がなかったこと、幼稚な種目ばかりで、種目数も少なかったこと、事前の話し合いに教科の時間が大はばにカットされたことなどの面白くなかった理由を挙げ、以前通っていた学校での運動会がどんなに楽しかったかを、美しい文字できちんと書いていた。

書こうと思ったことがその通りに書けた作文である。構成も叙述も、中一としてはよくできている。しかし、大人の手によって作られた華やかで賑やかな運動会を「楽しい」ととらえる皮相な感覚で裏打ちされた文章であった。この作文を前にして、私は考え込んでしまった。宗さんにとって、「書く」ということの意味は何なのか。いや、それより前に、彼にとって、運動会とは一体何だったのだろう。度重なる話し合いの間中、彼は何を考えていたのだろう。運動会という教材で、彼は何を学んだのだろうか――。

このような作文は、いわゆる「できる子」に多く見られる。これまでの経験から運動会とはこういうものという規格を作り、それに照らしてこれはすぐれているとか劣っているとか評価する力を持っている子に多い。ただ、そこには共通して、規格そのものを検討するという視点が無い。書くことによる認識の深まりがない。

宗さんに対する指導では、つぎのようなやりとりをした。

T 前の学校の運動会の方が楽しかったと書いてるけど、あなたも参加したの？

宗 いや、僕は見学。

T なぜ？

宗 足が悪いから。参加しない方がいい。

T 参加したくないの？

宗 したくないことはないけど……。

T ところで、分校の運動会は幼稚だと書いてるけど、どこでそう感じたの？

宗 子どもっぽいゲームばかりするから。

T なぜ綱引きなどをしないで、子どもっぽいゲームばかりするのか、ということをし少し深く考えてみたらどうかな。あなたの作文は感じたことがそのままによく書けているけど、考えたことも書いてほしい。なぜ、なぜと自分に問いかけながら。

宗 考えて書くんですか？

T そうよ。心の中にもう一人の自分を置いて、「なぜそう感じるのか」、「それは本当か」など、質問させるの。

宗 面白そう。

T じゃ、もう一人の自分を大活躍させて、書いてみましょう。

彼はしばらく首をひねっていたが、しばらくすると、「あ、そうか」とつぶやき、一心に書き始めた。そして書いたのは、「新光園の運動会は普通学校に比べて特長があります。」という書き出しで始まる作文であった。第一稿の否定的な書き方が消えていた。さらに推敲を重ねて、つぎの作文ができ上がった。

新光園は手や足にしようがいのある18才未満の人たちのしせつです。(略)この分校で久しぶりに運動会がありました。

新光園の運動会は普通学校の運動会に比べて特長があります。

特長の一つは、どういう運動会をするかについて生徒会で決定することです。(略)生徒一人一人がどんな運動会にしたいか意

見をだせるし、どんな人でもできるようなえんぎを考えるのである。だが普通学校みたいに何もかも先生がきめてしまふより生徒一人一人が意見をだした方が自分たちの運動会という気持ちになつて生徒はやる気である。(略)

ここで中学部の生徒で考えたゲームを一つ紹介しましょう。「めかくしリレー」は(略)車いすにのっている人と車いすをおす人の協力するゲームなので、(略)

新光園の運動会のいい点の二つめは、運動会の係はどんな係が必要かその係はどんな仕事をするか、係は何名必要かなど生徒たちが決めることです。(略)

僕達の運動会の種目数は普通学校の $\frac{1}{2}$ から $\frac{1}{3}$ 程度です。それと種目の内容も普通学校みたいな高度な演技はやらない。しかしここで述べた二つの点だけから考えても新光園分校のやり方がすぐれていると思う。

僕達肢体不自由児にとって今日は緊張の中にもわらいがあふれる一日でした。普通の小、中学校では参加させてもらえない運動会を自分たちでつくりあげ、力一ぱい参加することができました。

この作文を書くことによつて彼は、普通校の運動会の方が楽しいと思つている自分の後ろに、実は「参加させてもらえない」寂しさをかみしめている自分がいた、ということに気付いた。真の楽しさとは単なる賑やかさではなく、自分たちで作り上げる苦しみの中から生まれてくるものなのだということを、実感として知つていったようである。また、何もかも普通校の方がすぐれていて、障害児校

は劣っているという思い込みが氷解してきた。題も「運動会」としていたのを「肢体不自由児の運動会」と改めた。「新光園は手や足に……運動会がありました。」という前文をつけたのは、「分校の運動会のすばらしさを多くの人々に知ってもらうために、新光園の説明があるから」ということであつた。狭く自分の内側にのみこもつていた意識が、やわらかく広がりはじめたのであろう。

書くことによつて、無意識のうちにおさえていた感情が解放され、認識が変化し、深まつていったのである。

三、文が書ける

——成長への意欲——

重度の肢体不自由に加えて言語にも障害をもつ子どもたちの多くは、不就学期間をもっている。文字をもたない子は、常識的な面では生活年令を思わせる反応を示しても、その思考は浅い。しかし、不自由な指や口を動かして一旦文字を覚えると、その成長には目を見はるものがある。ここでは、中学部に入学して初めて文字を覚え一人の生徒について、「書く」ということの意味を考えてみたい。

半田正孝さんは、一九七六年一月、一三歳のときに新光園に入園した。それまで学校教育は全く受けていない。在園予定が三年間であることと年令とを勘案して、分校の六年生に編入された。入園当初はいつもうつむいてほとんど話をせず(中度の言語障害もあった)、周りからの刺激に対する反応も弱かった。車いすでの移動、学用品の出し入れ、排泄の処理などは自力ではできず、学校では全て担任に介助をしてもらつていた。

集団生活に慣れるに従って、表情が明るくなってきた。四月には中学部へ進学。上肢に強い緊張があるために書写は困難であったが、はね上がる腕を顎でおさえ、懸命の努力を続けて、少しずつ文字が書けるようになった。

中一の三月、生まれて初めての手紙を三時間かけて書いた。母に
あてたものである。

もはるです

まいにちいとがしいことだしよ

みんなおけんさですすか

ぼくもおけんさです

くんけ(れ)んでおべんきょうにがばてをします

てわざよなら

思っていることを文字で表現できた喜びに彼の顔は輝き、何度も読み返していた。

自分の願いや意志を表すことの少なかった彼が、「中二になって」という題を与えられて書いたのがつぎの文章である。

中2になりました はんだまさたか

おともだちとなかよくなじたいとおもいます

くんせ(れ)んやべんきうもがんばりますおわじます

友達と遊んだり話したりしてみたい、車イスを自分で動かせるようになりたい、いろんなことが知りたい、そんな思いがふくらみ始めているのがわかる。

五月には、短歌の鑑賞をした。そのあと、短歌をもとにした創作文を書かせた。自分がこの短歌を作った人になったつもりで、どんなときどんな気持ちで作ったか、などを考えて書くようにと指示した。彼は、

秋晴れのひかりとなりて楽しくも実りに入らむ栗も胡桃も(斎藤茂吉)

を選んで、

みなでえんそくにいきましたみなでこはんたべました。

ばすてかえりました。

という作文を書いた。バスに乗って遠足をしたときのことと仮定して書いたのである。彼にとって、想像して文を書くということがどんなに難しいことであろうかという私の心配は無用だったようである。

三年になった彼には、噴き上がるような熱気が感じられた。彼はまず、スロープに挑んだ。二階の教室へ行くための約六〇メートルのスロープを自分の力で昇降できたらどんなにいいだろうというのは、車イスに乗った子の切実な願いである。中三になると、この願いを実現させようと自分自身に挑戦する子が毎年出てくる。そして、半田さんもそうだった。掌のママはいくつもつぶれた。

五月、生徒会役員の選挙が行われ、彼は、副会長に立候補した坂本さんの応援演説をかって出た。

たかもとちえみちゃんわ やさちくてじがうまい はやしおほ

えるのははやい

ふくかいそになたらやずきじぶ(やる気十分だ)からどうかきよ
きいつひよいせてください

自分で書いたこの原稿をしかり握りしめ、緊張でふるえながら
演説をした。入園したころには想像もできなかった、積極的できき
いきした半田さんが生まれていた。

六月、母の日、父の日を迎えて、両親におくる作文を書かせた。

ちちのおもしろいところ

ごはんのときにへおる。／おきやくさんがきたときお／かまい
なじにへをへる。／まいしゅう土よう日よう／にけいばにいきま
す。／そしてけいばからうちに／かえたら「まけた」といいま
す。／「かっ(た)」といいます。／「そしたらおみやげぐらい／
かてもいいのにかてこな／い」とはかちちにいいました。／「
けいばにいかなくてもい／いのにはくをたまには／あそびにつれ
ていてもよ／かろうもん」といいました。／ちちはこういいまし
た「わかっるとる」といした。

はははいつもわすれてこ／まるからやめてください　／ぼくが「
なにをわかってく／ださい」といきました。／はははへんじをして
わす／れてかてこないからわ／すれないようにしてくた／さい
はくのねかいはたまにわ／あそびつれていつてくください

私は一読して驚いてしまった。いきいきとした文章。愉快な両親
の姿が見えるような書き方。彼の明るくて素直な性格がそのまま表

れている。それにしても、何と長い文章が書けるようになったこと
だろうか。書く対象として父母を見るということは初めての経験で
あり、とても楽しかったようである。病棟でパジャマに着替えたあ
とも、ただひたすら書き続けていた彼の姿や、この作文を書いたノ
ートを提出するときに言った「おもしろかったあ」ということは
が、その楽しさを伝えてくれた。

中一入学当初は、大学ノートに三センチ角のマス目を作って文字
の練習をした。それからA五版の国語ノトを使った。文字は、八
マスから一〇マスにはいるように次第に小さく書けるようになって
た。この作文を書いたところから一二マス(一・五センチ角)のノ
トが使えるようになってきた。

一〇月は待ちに待った修学旅行であった。「東寺がよかった」、
「夜、京極で買い物をしたのがとても楽しかった」など、いろいろ
な感想が出たが、半田さんは、「映画村とSL博物館がおもしろか
った」と、この二カ所について感想文を書いた。

えいがむらについて

もんに　はいりました。／かいじゆが　うみから　／でてきま
した。とてもおも／しろかた。

ろうやに　ありまつくん／を　いれようとしたら　に／げまし
た。

はしの　うしろは　かい／だんになつとりました。

とおる　はばが　せまか／った。

おもては　おみせや　だ／った。

とうやまの きんさんに／あいたかった。

そのりゆう／は さいんして もらいた／かった。

らじこんを したかった。／じかんがなかったので／されな
った。

SLについて

しゃりんが 大きかった／ので びっくりしました。／きかん
しゃを はじめて／みました。たくさんありま／した。

はまもとせんせい あり／まつくんが きかんしゃに／のりま
した。がひもを ひ／っぱってぼうとなりま／した。びっくりし
ました。／いそいではし／った。

じょうききかんしゃを／はじめてみました。

テレビでよく見る「遠山の金さん」が撮影されるころというの
で、興味津々であったらしい。しかし、奉行所も日本橋もセツトは
表だけで、その後ろはベニヤ板であったり階段になっていたりした
ことが印象に残ったというわけである。「とうやまのきんさんにあ
いたかった。そのりゆうはさいんしてもらいたかった。」というこ
ろでは、「『こう思った』と書いたら、そのときの自分の気持ち
をもう一つ深く思い出して、なぜそう思ったか、というところまで
書いてみましょう。」という私のことを忘れていなかったことが
わかる。自分の心を発掘するという練習は、学級会などの中でもく
り返し行っていた。また、この作文では、ことばとことばの間を一
マスあけることという注意をし、でき上がった作文を私が読んで聞
かせて、まちがった表記は自分で訂正させた。

一二月には、途中で退園して家に帰ってしまった江頭さんに手紙
を書いた。半田さんはちょうどカタカナを覚えたところで、

エガサラサンヲゲ／ンキデスカ中三／ノニンナハゲン／ヨエガ
シタン（江頭さん）ハド／ウシテミンナীগ（と）タイエンスレ
バキヨ／カタノニナンデミナ／トタイエンシナ中（なかった）ト
ネレハサヨナラ

と書いた。

ひらがなを覚え、カタカナを覚え、自分の名前を漢字で書けるよ
うになり、車イスを自分で動かせるようになり、排尿が自立し、学
級の一員としての自分を見つめることができるようになってきた半
田さんは、このころから「先生、卒業するとはいやです。何回も落
第して、もっともっと勉強したいよ」と言うようになってきた。一
六才になったいま、やっと自分の成長に気付く、もっともっと成長
したいと願う彼を、私も、できることなら何回も落第させてやりた
かった。

一九七九年三月、卒業式。卒業生の数が少ないので、分校では全
員が答辞を読むことになっている。二月初旬に文化祭を終えてから
直ちに答辞の準備にとりかかった。書き始める前に、中学部に入學
してから今日までのことを、できるだけくわしく思い出させた。そ
の際、一つ一つのできごとや学習を通して、一人ひとりが何を学
び、どう成長してきたのかを、ゆっくりと確かめさせていった。卒
業と高等部入試とを前にして浮き足だっていた子どもたちは、三年
間という年間がいかに自分たちを成長させていたかを知って驚き、

やがて落ちて着いていった。答辞といえは、行事とその感想の羅列に
なりがちな傾向があるが、この話し合いに時間をかけ、その中で自
分と周囲をじっくりとふり返らせることは、卒業に際して真に言わ
なければならぬことを発見させる上で、非常に大切なことだと思
う。この話し合いを終えて、「答辞として、友だちや両親や先生に
言いたいことを、どんなに長くなってもいいから書いてごらんなさ
い」と言うと、みんな、長い長い文章を書いてきた。その原稿をも
とに、こんどはひとりひとりと話をし、推敲させた。子どもたち
は、消燈時間を特別に延長してもらって、最後の作文を仕上げ、答
辞は完成した。

とうじ 中三 半田 正孝

六ねんのおわりのころに
きました。おしっこもじ
ぶんでは できませんでし
た。ひらがなも よめませ
んでした。

中一になって、生まれて
はじめて てがみを かき
ました。うれしかった。

中三になると、いろいろ
なことが できるように
なりました。

とけいを よむことがで

きるようになりました。ア
ルフアベットか よめるよ
うになりました。カタカナ
やかん字もかけるようにな
りました。もっともっと
できるようにになりたいと
思います。

スロープの上り下りがじ(ぶん)で
できるようになったのが一ばんう
れしいです。手がきずだら
けになったけど、さいしょ
は40分かかったのに、今
では 10分であるように
なりました。

こうとうぶに おちても
しせつでがんばって、らい
ねん きつとうけます。
しんぶんや ほんやら よ
みたいからです。
みなさんも がんばって下
さい。先生 ありがとう
ございました。

彼にとって、「書く」ということは、「いのちに目覚める」とい

うことであつた。文字を覚え、ことばを書き、それが母への手紙という形になつたとき、彼は自分という存在にはっきりと気付いたのではないだろうか。書くことよつて自分が表現できることを知つてからの彼の作文には、「新しい発見への驚き」と、「自分を伸ばしていきたいという願い」とがはっきりと表現されている。表現することの喜びは、よりよく生きようとする意欲につながっている。

障害児に限らず、「書く」ということは、非常に大切なことである。自分の感動や認識を「ことば」でとらえないことには書くことができないし、ことばでとらえるためには、「考え」なければならぬからである。何を考えるのか。私は、自分の変化（成長）について考えるのだ、と思う。「ああ、何となく感じていた気持ちは、こういうことばで表すことができるんだな」、「おや？ 書いていくうちに考えが変わつてきたぞ」など、書くことを通して生じる、自分に対する第三者としての意識や新たな自分の発見が、書くことへの意欲につながるであらう。そこに、書かせることの意味があるのではないだろうか。

（前・福岡県立福岡養護学校新光園分校教諭）